

ジャスミンおとこ

分裂病女性の体験の記録

ユニカ・チュルン

西丸四方訳

みすず書房

暗
い
春

彼女の父は彼女が知った最初の男の人である。低い声で、濃い眉がほえんでいる黒い目の上に美しく弧を描いている。たばこの煙と、皮と、オードロンの匂いがする。長靴はぎゅうぎゅういい、声は暗く暖かい。愛情は嵐のようであってまた滑稽でもある。ゆりかごにいる小さなものに冗談をいう。彼女は最初みたときから父が好きである。彼女が生れたとき父は戦争から戻ってきた。父から受けた最初の印象は深く、忘れられない。ふだんまわりにいる女の人より好きである。彼の匂い、彼の力強い、長い手、彼の低い声。

しかしもっと大きくなると父はあまり家にいないのに気がついて悲しく、どうしてだろうと思う。いればいいと思う。父はめったに現れない。そしてめったに現れない人は恋しがられる。

長いこと留守をしてまた会々と、父はおとなの婦人にするように手に接吻してくれる。限りなく父にひかれる感じがする。父は何度も何度もいらして家を出、何ヵ月もしてから、日に焼けて、おだやかになって戻る。

彼はどこで過ごすのか彼女は知らない。めったに現れない、秘密ありげな人から発する引力に

気づく。これは彼女の最初の教訓である。彼は友人たちを家へ連れて来、この人たちは彼女のことを「王女さま」と呼ぶ。彼らは彼女を空中高く投げ、彼女は男の人のすることは何でも深く信頼して、落っこちたらこわいと思うすぐ前の瞬間に、またつかまえられると感じる。男の人は彼女の目には大魔法使い、本当にはないようなことでも何でもできる者と思える。二歳のときに最初の歌を聞く。戦争は終りに近づく。彼女は乳母車にのせられて街を通って行き、あるテラスのところを通り過ぎると、屋根の下にたくさん灰色の兵士が銃を持って腰をおろしている。

兵隊は昔の軍歌を歌っており、暗い雨の日に悲しげに、悲劇的に響く。精鋭ここに一万、出で立つ先は演習地、ジャンドンバン、出で立つ先は演習地、ジャンドンバン……。

女の子は乳母車を離れて、庭のかいの上に坐って泣きだす。それからその子は父の命があぶないように思っただけで父を呼ぶ。何か恐ろしいことの予感がこの幼い女の子を襲う。

しかし戦争は終り、父は戻ってくる。やせてきりっとして、彼はデスクのところに坐っている。大きな机で書類がのっている。緑の傘のついた灯が彼の美しい悲しげな顔を照らしている。彼は病気のようだ。彼女が父を呼んだころ彼はチフスであぶなく死ぬところだったことは彼女は知らない。

彼女は父のデスクの下の暗いところに坐ってびかびかの靴をなでる。家中の人を観察するように父をも観察する。男の人と女の人という。その仕事は皆ちがう。自分の室で寝なければならぬときには、窓の十字の棧を見ている。十字の形を見ていると男の人と女の人、この二つの棧がぶつかる点は秘密を示してくる。上下の棧は男の人で、左右の棧は女の人だ。この二つの棧がぶつかる点は秘密を示して

いる。(彼女は愛のことは何も知らない。)男の人はズボンをはいており、女の人はスカートをはいている。ズボンの中に何が隠れているかは、兄を観察して知る。彼が服を脱いだとき、両脚の間に見えるものは鍵を思い出させ、彼女自身は股に錠がある。彼女も他の子と同じように二つの性のきまりを発見する。誰にもわからないように、ひとり、父の蔵書に説明図を探す。百科辞典に彼女と兄に似ている裸の絵を見つけた。

これから長い間、男の体のしるしが彼女についてまわる。それに全く夢中になる。父が服を着るとき彼女はものめずらしげにじっと見るので、父は禁じられたものを発見しようという彼女の意図を感じ、恥じて彼の性を覆い隠す。彼女はしかし救いがたい好奇心にさいなまれる。ある日曜の長い朝に、彼女は母のベッドにもぐりこみ、もう美しさのなくなった、大きなふくれた体にびっくりする。満足を得ない女性はこの女の子を開いた、湿った口で襲い、その口から裸の舌が動いて出てくる。それは兄がズボンで包み隠しているものと同じくらいの長さがある。びっくりして彼女はベッドからとび出し、ひどく心が傷ついた感じがする。母と女性への深い、おさえた嫌悪が彼女に生ずる。彼女は両親の結婚はうまくいっていないことを知らないが、ある日父が、知らない、美しい、エレガントな婦人を家へ連れてきたので、そのことをおぼろげに感ずる。この婦人は彼女に大きな、高価な人形を贈物にくれる。彼女は家庭の不幸な状態のため復讐的になり絶望的になって、ナイフを持ってきて人形の両眼をえぐり出す。人形の腹を切り、高価な衣裳をずたずたに裂く。おとなは誰も人形をこわしたことにとかくいわない。父を見ると、父は美しい婦人を見るのに夢中で、小さな女の子が今ここにいることを忘れている。ひどい孤独感で

いっぱいになって、おとなの世界を憎みはじめる。美しい婦人の夫が現れる——肥った白いブロンドのスカンジナビア人——。母はあたりまえのように彼に向いてしまう。こうしてこんどは家の中に二つのカップルができ、その関係をめいめいお互に隠さない。好奇心の強い女の子を片づけるために、母は昼食のあとにベッドに入っていないと命ずる。室を暗くしても眠ることはできない。自分にも何か補いを見つけようと考える。室の中にある長めの堅いものを皆ベッドの中へ持って来て両脚の間へおしこむ——冷たい、びかびかした鉄、ものさし、くし、ブラシの柄。窓の十字の棧をじっと見て、自分への男性の補いを探す。白いベッドの冷たい金属の柵にまたがって乗る。金のネックレスをはずし、両脚の間で前後にひっぱる。熱中してやって、とうとう痛くなる。そっと起き上って裸で階段の手すりをゆっくり滑りおりる。彼女は快感をはじめて睡眠中に知り覚え、それ以来この感じを、そうしたいと思えばいつでも、生じさせることができるようになる。

ある朝目がさめると、夜何か途方もないことが自分に起こったのを思いだした。しかし自分の体のもてあそびは極端に疲労困憊させて、まもなく心悸のため息もできなくなる。彼女は蒼白になり目の下にくまができる。父は彼女のデリカシーに惚れこんで、彼女を「アイヴォリーちゃん」と呼ぶ。父は彼女が十二歳になるまでずっと、他のどんな男の人より好きな男の人である。父の美しい女友達は去ってしまった。彼女の強い香水の香はまだずっと方々の室に残っている。母は新しく好きな人ができ、この人は女の子に贈物をどんどんくれる。父は近東へ旅行に出かけた。彼は彼女にヴェールを被った婦人の絵葉書を送ってくれる。家は静かである。誰も彼女のことを

気にしない。そこへ新しい他人が若い女中の姿で現れる。フリーダ・シュプリッターとかいう名の女中である。子供はフリーダからもう離れたがらない。フリーダが家事をやっている間そのあとを追いまわす。昼食のあとフリーダは自分の室でベッドにころがって厚い本を読む。それは「シニトルツェンベルクの城」という名の本である。表紙には色彩画があり若い美しい伯爵夫人が白馬に騎って獵に行く。緑の一本の羽がその帽子にひるがえる。肩には一羽の鷹がとまっている。しげみには情人が隠してある。フリーダは服を脱いでしまっている。彼女は白いレースがついた紫色の絹のペチコートを着けている。唇には紅がぬってあり、髪の毛は黒い巻毛となって裸の白い肩にたれている。ライラックの香水の匂いがする。指の爪は長く真っ赤である。靴の踵は高くて折れそうである。フリーダは読みながらたばこを吸い、チョコレートキャンディを食べる。おとなの婦人のような感じである。小さな女の子はフリーダの腹の上に乗って口をフリーダの唇におしつけて、たばこの煙を吸いこむ。フリーダはされるがままになっている。なでられ、キスされ、髪を引っぱられ、足のうらをくすぐられる。フリーダは十八歳で、映画俳優志望である。毎日の午後ダンスに行く。子供はフリーダが紫の下着を黒の underwear と着かえるのに脱ぐのを見物している。フリーダは腋の下に粉をかけ香水を振りかけ、耳とパンツの内部に香水をかける。フリーダは、ベッドの上に坐ってじっと見つめて一挙一動を追っている子供に頓着しない。子供にとってフリーダは驚くべきものの中心となる。フリーダの筆箱は広いレースのついたいろいろの色の絹の underwear でいっぱいである。色のついた石鹼箱の蒐集狂である。フリーダの筆箱の引出しは香水店のような香がする。靴下どもには絹のばらが縫いつけてある。こんなにきれいなものにも拘

らず、彼女は大きな室がたくさんある大きな家の中で気持ちがよいように働く。仕事はきつい。フリーダはきしゃで、晩になると死んだようにベッドに倒れ込む、惜しいことに彼女には全然ハンサムでない男の友達がいる、年をとって、腹が出て、頭が禿げていて、車を持っている。日曜の午後にはいつも彼女を連れ出す。

子供はフリーダが美しい若い王子を夫にして、いっしょにシニトルツェンベルクの城に住めばいいと思う。母はこの若いきしゃな娘を家におくのに堪えられなくなる。

母は子供がフリーダ・シュプリッターの話ばかりするので、やきもちを焼くようになる。彼女はフリーダがよく仕事をしないという口実で暇をやる。子供は悲しみに慰めるすべがない。フリーダのあとがまは不美人でせむしである。フリーダの室でのすばらしい時間は終ってしまった。その室ではもういい香はしない。子供はフリーダが忘れていった耳輪の片方を見つけそれを自分の宝物に加える。

彼女は学校で同じ年の男の友達を二人見つけていた。シナ人のような顔の友達の方が好きだ。彼は彼女と同じように無口である。彼の黄色い顔は小さな閉ざされたお面のようである。彼の黒い目は細く切れ長で、顔に情熱的な表情を与える。彼はおずおずしているが激しく彼女を好いている。この出会いは彼女の十歳の時に起こる。彼はギムナジウムの緑のビロード帽をかぶっている。彼の友達はいつも離れずに自転車で彼といっしょにいるが、陽気で、彼女におどけてみせる。彼はおもしろいしかめ面をするのがとてもうまい。彼女はそれがおかしくて笑うあまり腹が痛くなる。この似たところのない二人は毎日午後に彼女をたずねて来る。だんだん彼女はフリーダ・

シニブリッターのいなくなったことをあきらめて元氣を出してくる。彼女は何時間も驚^{つた}のからんだベランダで過ごす。おどけのうまいのはフランス、口数の少ないのはエクベルトである。よく三人の子供は体の重さがなくなったといって遊ぶ。彼らは向うみずに一番高い壁からとびおり、猫のように軽々とやわらかく、手と足で地面におり立つ。彼らは踊り、だんだんと速く廻り、とうとう目がまわってひっくりかえる。彼らは盗賊と王女さまごっこをし、彼女は一つの深いやぶから別のやぶへと飛んで、盗賊たちから身を隠す。それでも捕まると盗賊たちはインディアンに変わり、いけにえを火刑柱にしばりつけ、弓と矢で射る。遊びは危険になるが、それが彼女の望むところである。彼女の目はしばってふさがれる。彼女の服が燃えだしそうな近くで火をつける。彼女は髪を引っぱられ、つねられ、ボクシングで殴られる。彼女は一言も泣きごとをいわない。彼女はだまって堪え、マゾヒズムの夢想にわれを忘れて耽るが、しかえしをしてやろうとの氣持は全くない。苦痛を受身にだまって受けることがよろこびとなる。彼女がしばった紐をむりに引っぱって、それが肉に深くくいこむと官能的な快感を感じる。彼女はあざけられ、ばかにされ、はずかしめられる。彼女はそれでもエクベルトの静かな、自制した顔をまね、ついにどうしても負けない女勇士として紐をほどかれる。彼らはインディアンとの和睦のしるしのピースパイプをくゆらす。それは三つの栗をくりぬいて、乾いた葉をつめて、麦藁をさし込んだパイプである。彼女は咳こんで、とうとう涙を出してしまう。

夕食までの時間はあまり速く過ぎる。

彼女は母と兄といっしょに丸いテーブルに就き、父の席があいているので悲しげに見つめる。

十年もの間堪えてきたみじめさの感じに襲われる——フリーダもいなくなった。父もいなくなった。母は嫌いだし、兄とは何の接触もない。夕食の後書斎の隅のゆかの上に身を隠し、ジュール・ヴェルヌの「海底二万マイル」の挿画を見るが、これでもう百回目にもなろう。ネモ船長の暗い、メランコリックな顔がとても好きになり、潜水艦ノーチラスに侵入してきた、何本も腕のある大だこの曲った腕を乗組員が切りおとす絵が、こわくてまたたのしい。ネモ船長は彼女の英雄たちの一人で、この英雄たちなしには暮せない。彼女のまわりの人たちよりもっと身近で氣心がわかる。九時になるともうおやすみなさいと促され、毎晩こわさに震えながら、大きな広間を通り、階段を上り、長い暗い廊下を過ぎ彼女の部屋にゆく長い道のりを歩いてゆく。

夜になるといつも、この家にいるような氣がする大きなゴリラの骸骨のカタカタ鳴る音がとてもこわい。ゴリラは彼女をしめ殺しに来る。通りすがりに彼女は毎晩のようにルーベンスの「サビニ子女の強奪」^{〔中部イタリヤの古代民族〕}の大きな絵を眺める。肥った裸の二人の女の人は母を思い出させて、嫌惡を起す。後脚で突っ立った馬に女をひき上げる黒いすばらしい強奪者は、彼女の感嘆を呼び、ゴリラから守ってくれるようにお願いする。家の中の古い、黒ずんだたくさんの絵にぶつかると、そこに画いてある英雄たちにお願する。そのある一人は学校の映画会でみてすばらしかった「海賊」と「バグダッドの盗賊」のダグラス・フェアバンクスに似ている氣がする。彼女は自分が女の子であることを残念に思う。彼女は男であればいいと思う——もうおとなで、黒いひげを生やして、焰のような黒い目をして。しかし彼女は小さな女の子で、恐ろしいゴリラが自分の室のベッドの下にいて、こわくて冷汗を流しているのだ。彼女は目にみえないものが

こわくてしかたがない。

あの骸骨が夜になると彼女の部屋にはいりこむのではないか。その硬い、とがった骨のかたまりは彼女をベッドの中で押しつぶそう。彼女が走り抜けようとしてサーベルにつき当たり、それが闇の中で壁から倒れてガチャガチャいうと、恐れは最高潮に達してカタストロフィーになる。彼女は自分の部屋に走り込み、戸をばたんと閉じる。戸をびたりしめて、かんぬきをかける。またもや命だけは助かった。あしたの晩はどうなることだろう。

服をぬいでベッドに入ると、全力をあげて空想で夜の番人を彼女の誰もいない部屋に呼び出す。番人たちは彼女の英雄の姿となって、だまってベッドのまわりに竝んで守る。それはサビニ子女の二人の強奪者、叔父のフアラダが画いた、いばった強いアラビア人、びかびかのサーベルと、帯にいっぱいピストルをつけたダグラス・フエアバンクス、オルガンで大きな音で勇ましい音楽をやるネモ船長などである。彼女は自分の部屋に番人たちの黒い輪がはっきり見え、次の朝自分がまだ生きているのは彼らのおかげと思う。

午後になると気位の高いスペイン人の女の友達のエリサ・ウルキンサがやって来て、恐ろしい、いたましい「放蕩息子」の物語の芝居をやる。これは彼女が作ったドラマである。二人は、彼女の父が近東から持ち帰った、金モールの飾りのついた絹のアラビアの衣服を着る。部屋は暗くしてある。二人は夜砂漠にいる。二人は王と妃で、この父と母は彼らの放蕩息子のためにぞっとするような長く尾をひく嘆きの声をあげる。二人は号泣するようなドラマチックな言葉を作り出し、これが悲嘆を全世界に表現するものなのであるが、二人以外には誰も理解できない。この想像上

の言葉は母音だけでできている。二人がくたくたになると、窓のシャッターを開き、ぼんやりとしびれたように、明るい日光をじっと見る。昼だ。二人は一晚じゅう放蕩息子のために泣きわめいたのだ。それから二人は口論をはじめ。二人のどちらもこんどは、盗賊にやられて、血まみれで、父母から遠くはなれて、暗い森の中に横たわっている放蕩息子の役をやりたがる。

エリサは赤インキの瓶をアラビアの衣服にふりかけ、赤い斑点のついた手拭いを頭に巻きつける。彼女の方が二人のうち速かった。彼女は地面に倒れ、腕と脚をのばし、うめきながら目を閉じる。放蕩息子は死にかけている。うらやみで一ばいになって彼女はエリサを見やり、自分ならもっとずっとうまくやれると思う。エリサは地面の上でのたうちまわりうめくの疲れでしまい、今度は彼女の番になる。彼女はこんどは父の役をやり、息子を見つけ、血を洗いおとし、傷に包帯を巻いてやる。

息子にはがい葉をのみこむと生きかえり、老いた王が死の床につくと王の位につく。この劇のやま場は想像で作った悲嘆の言葉である。暗くした部屋は遠慮を皆取去ってしまっている。二人は庭に出て、「最後のモヒカン、ウンカス」を演じ、ウンカスはマグアによって刀を心臓に突き刺される。それから彼の父のチンガググクの長い挽歌。二人はクーバーの「皮ズボン」のくだり全部を暗誦して朗読する。二人の演ずることに恐ろしいものと危険なものどが宿っている。二人は無制限にドラマに没頭する。変化のない、見張られた家庭生活はもう長いこと退屈になっていて、心をわき立たすものは何でもやってみる。生活は不幸なしには堪えられない。

七月の静かな暑い日の、ある午後のこと、雷雨が荒れそうなときに、兄が彼女の部屋にこっそ

り入ってきて、彼女をベッドの上に投げ倒す。顔をこわばらせ、不気味に口をきかずに、彼はズボンのボタンをはずし、彼女に彼の脚の間にある長くなったものを出して見せる。彼女は好奇心と恐れに苦しむ。彼女は彼が何をしようとするのか知っている。しかし彼女は彼をあなどる。彼は彼女の目には十六歳のばかな少年でしかない。彼女は全力を尽くして彼から身を守るが、彼は彼女より強く、彼女はもはや身をふりほどくことができない。彼女は彼が若すぎるのであなどる。彼は彼女に襲いかかり、彼の「ナイフ」(彼女のいい方によれば)を彼女の「きず」につきとおす。彼は彼女の小さな体にあえぎながら重くのしかかる。

彼は速い律動で体を上げ下げする。彼女は突き刺すような痛みを感じ、その外は何も感じない。彼女は恥ずかしく、幻滅を感じる。彼女のベッドのまわりの男の人たちの黒い輪に毎晩夢中になる方がずっと心がはずみ官能的快感があつて、兄から受けたこのみじめな現実など何でもない。彼女には長く思えたが、しばらくすると彼はベッドからこころがり出て、だまって出てゆく。ちょっとして彼は再び入ってくる。彼の顔はたけり立ってまっかである。「おふくろにこのことを何かいったら、ぶち殺してやるからな。」

彼女は彼を何もいわずにあなどつて、じつと見る。彼女は辱しめられて、怒っている。

この事件は兄と妹を宿敵とする。

彼女は兄を殺したい欲望を感じる。ただ彼が彼女より強かったから、彼の欲することができただけなのだ。彼女は彼のあらゆる禍を願う。どうやれば彼を死ぬほど責めさいなめるか夢想するようになる。

フランツがやってくると、よく彼は彼女をひどく笑わせて、彼女はパンツの中へおしっこをもらしてしまふ。犬はこの臭にひきつけられて彼女の脚の間へ首をつっこむ。このことは彼女にある新しい考えを起こす。彼女は地下室へおりてゆき、犬小舎に入り脚をひろげて冷たいセメントのゆかに横たわる。犬が彼女の脚の間をなめはじめると、ゆかの冷たさはよけい官能的快感を増させる。彼女は恍惚状態に陥り、飽きずになめてくれる舌に向つて腹をそらせる。

彼女の背中では硬い石にあたつて痛い。官能的快感を受けているときには痛みがある方が好きだ。いまにも彼女の様子を見に誰かが来るかもしれないという可能性があると、この興奮はますます大きくなり、高まる。父の女秘書が隣の部屋でタイブを打つのが聞こえる。彼女が一時間も犬の舌に夢中になっている間に、上では兄が新しい発見をしている。彼は彼の母の化粧台の前に坐り、母が美容に使う電気マッサージ器をいじっている。この器械は体につけると振動を起こす。母はそれを顔のマッサージに使い、息子はそれをズボンを開けてつつこむ。彼女がくたくたになつて、めまいがしてふらふらになつて地下室から上つてゆくと、兄が首を後にそらせ、目を閉じて、彼の精液を失っているのを見してしまう。空は暗くなった。雷雨が来そうである。大気はかき立っている。おとな達は、くりかえし、くりかえし、この言葉に尽くせない強い感じを味わうこと以外頭がない、この二人の子供のことを気にかけない。

兄の二人の男の友達は街の工事場の暗い長い下水管の中に隠れて、雷雨の間、自慰をする。彼女は父の書斎に入り、フックスの「風俗史」のわいせつな描写に夢中になる。同時に、こんな本を持つている父を悪意に解する。彼女はけだかい、神のような父を持ちたいと思う。彼女はこ

本を持って大きな皮張り椅子の後の一隅に隠れていたもので、挿絵を見ながら自慰をする。彼女にはもうほかのことは考えられない。しかしあまりにしばしば感じられた官能的快感はあとに重苦しい空しさをのこす。彼女は本当の補いを求めるが一つも見つからない。彼女の年ごろの子供は皆これと似た経験をしている。彼女が知っている小さな女の子は、鉛筆や人參や蠟燭を脚の間へつつこみ、テーブルの角に身をこすりつけ、椅子にのってじっとしておらずに、あちこち滑って体をずらす。

彼女たちはまだ非常に若い、この早い時期の悩みの救いと治癒は男性によるしかないことを皆ばくぜんと感じていた。しかし彼女たちの誰も、腕にかかえてくれるような男性を知らない。彼女たちはまだあまりに小さい。彼女たちはお互にまだ遠慮がない。彼女たちはとめどなく口が軽く、自分たちの体の経験を報告しあう。彼女たちは女の友達が自分よりも、もっといろいろなことを知っていないことを知ってがっかりする。彼女たちはどうにもならずぐるぐる廻るばかりで、将来のことを夢に見始める。彼女は怪しい男が行う暴行のことを夢みる。空想の全力をあげて彼女は野蛮な人殺しの男にあこがれる。彼女が夜自分の室に寝ていると、ダイヤモンドがきらめく黒い室がゆらめくたいまつに照らされるのを想像する。黒い色、彼女の知っている中で一番気味の悪い色がこの光景にしみ渡っている。彼女は角の尖った黒い冷たい大理石の塊の上にいる。彼女の誘拐者が彼女をしばらくつけたのだ。彼女は裸である。彼女は寒さと気のたかぶりに震えている。たいまつのはっきりした火は黒い大理石の壁に反映している。彼女の拷問のベッドの角は背中に食いこむ。黒い服の男たちが環になって現れて彼女をとりかこむ。燃えるような目は

ものすごい仮面の孔からじっと見ている。何人かはびかびかのヘルメットをかぶっている。彼らはその仮面をかなぐり捨てると、彼女はアラビヤ人やシナ人や黒人やインディアンや荒々しい顔が見える。彼女は白人より有色人の男の方が好きである。彼らの誰一人として彼女の知っている男の人に似ていない。彼らはものもいわず殆んど動きもしない。彼女は彼らがこわい。恐れというものは彼女にとって非常に重要である。彼女は恐れと驚きを好むのだ。彼女はこういう男たちの注目の中心になるのは限りなく光栄に感ずる。どの男の人も武装している。彼女は彼女を殺しに来たのだ。このことは彼女にとって大きな光栄である。彼らは王たちや、貴族たちや、王子たちである。耳を聳るようなオルガンの演奏が響く。おびやかすような、嘆き悲しむような音楽だ。オルガンをひいているのはネモ船長だ。彼女はしばしば紐をぐいと引っばると、よけいに深く肉に食いこむ。彼女の想像力は非常に強いので、その痛みまで感じる。この光景を、ゆっくりといつまでも、千回も刀で突かれてついに彼女が死ぬところまで、いつも続けてやれるとは限らない。大声を立てたり顔つきを変えたりすることは禁じられている。一本のナイフがゆっくりと彼女の「きず」に突きささり、それは犬の熱い、よく動く舌となる。彼女が官能的快感を受けていると、インディアンがゆっくりと彼女ののどを断ち切る。彼女が一人で暗いところにいる時にだけ、こういう光景を描き出すことができる。一人も救助者はいない。彼女は毎晩毎晩、くりかえし死の責苦を被る。

昼間は彼女は学校で義務を果たさなければならない。彼女の好きな先生が一人おり、この先生は、彼女が作文が一番うまいので、クラスの他の女の子よりひいきしてくれる。他の女の子はそ

のために皆彼女にやきもちをやく。

先生はいい声で女の子たちに抒情詩やドラマを朗読して聞かせる。彼は先生になる前に俳優であつたという噂が伝わる。彼はブロードの少し白くなりかかった長髪で、驚鼻で、青い、光った猫のような目をしている。エレガントな服装で、言葉を長くのばし、Rを巻舌で発音する妙な癖がある。このため彼は外国人のように見え、この小さな女の子は外国風のものには何でも夢中になる。彼女はクラスの他の多くの女の子と同様に彼が好きになる。彼女の目つきがあらさまな情愛をこめて彼に向けられたりすると思いがけないことをいって彼女をびっくりさせる。彼は結婚している。彼の奥さんは彼の以前の教え子である。奥さんは彼を昼に学校へ迎えに来る。しばらくすると奥さんの腹が大きくなり、驚くほど前の方へ突き出る。女の子たちは奥さんはおめでたであることがわかり、彼女たちの目を先生のズボンから逸らせない。彼女たちはその尊敬する先生が、今まで選り抜きの、超人間的なものとされていたのに、彼の奥さんに近づき子供を生ませるとは、彼女たちの父親と変りはないという事実に惑わされてしまう。彼女たちは彼のこんな行いをいやだと思う。彼は彼の神のような存在からまさかさまに墜落して、月並なつまらない人間になる。彼が他の人間たち皆と同じであることを彼女たちはいやだと思う。彼女たちは彼に敵意を持った話をしあい、彼を一度上らせた王座からひきおろし、きたないひそひそ話の中をひきずりまわす。彼女たちは仲間同士で彼を悪くいい、わいせつなあだ名をつける。彼が授業中質問を出すと、彼をあざけり、なまいきな答やひどい答をする。クラスにのろいがかかったようである。雰囲気は息がつまるようになった。チャームは砕かれてしまった。彼は腹を立てるが、な

ぜ女の子たちがこう変ったかをうすうす感ずるので当惑もする。彼は彼女たちに長い罰の宿題を出したり、居残りをさせたりする。彼はもう話を朗読してやらず、いやな文法をやる。彼は子供の心のいわゆる「いやらしさ」のために恥づかしい目にあい、心を傷つけられる。

先生の奥さんがある日また体が細くなり、チャミングになって学校の前に現れると、子供たちは救われたような気分になる。奥さんは乳母車を押している。女の子たちは皆ベビーをなでたがる。新しい小さな生物によって彼女たちは、まだ自分たちの問題ではないが、どこまでも彼女たちをつけまわす、おとなのむずかしい問題から解放された感じがする。だんだんと彼は再びもとの大きさと成って女生徒たちの上にそびえ立つ。万事よくなる。

しかし平和は長くは続かない。ある夏の昼頃、彼女が女の友達と学校から帰るとき、街は昼食時で人気がなかったが、二人は自転車ひよけの男に会う。ものすごい、いやな、むき出しのものが彼の開いたズボンから子供の方へ向かって、目がくらむように、ぞっとするようにとび出している。彼は二人を呼びよせ、長さが少なくとも半メートルもあるように思えるその巨大なものに触って、ごらんといい。死ぬほどびっくりして二人は手をしっかりとつなぎ合って全速力で家の方へ逃げる。しかし彼女たちの足がかわで地面にしっかりとついていたように、その場から動けないような、夢のような、こわい気になる。あのむきだしのがますます大きく長くなって二人をきつと追いかけてくると思ひ、最後の力をふりしぼって家へとびこみ、戸をばたんとしめる。彼女たちは父の仕事部屋にかけこむと、父はおだやかに女秘書に手紙を口述しているところである。彼女たちは彼につたない言葉で事件の話をする。父はその男の人は街でおしっこをしようとしただけで

はないかという。しかし二人が自転車のあの男の人はあのものすごいものに触ってごらんといったというと、父は警察に電話をかける。警察はどんな様子の男かくわしく知りたいというが、子供たちは、彼の脚の間のもの以外は何も思い出せない。

階上の彼女の部屋で彼女は窓のところへいって外をのぞいて見る。その男は消えてしまい、街には誰もいない。家について安全なので、また勇気が出て、女の友達はいう、「あの人が今外にいたら、行ってあれをつかんでやるわ。」そして二人ともヒステリックにげらげら大笑して笑いが止まらず苦しくなる。空想がたかぶって、自転車の男が今外の街にいたとしたらこうなるだろうという思いも及ばないようなことを空想に描き出す。最初のショックから覚めた今となってみれば、あの男は子供たちとちょっとした遊びをしようとしたのだから、そのなりゆきを予想しないのだ。彼は新しいえじきを探している最中で、このえじきを驚かし、ショックを与えることが彼を満足させるのである。「あの人が私たちにしろといったことをしたら、きっと私たちを殺してグルーネワルトに埋めて隠したわよ」と彼女は感慨無量のおももちでいう。

「あの人が今外にいればいいな。私は行ってあれをつかんでやる」と女の友達はどう一度いう。「殺人者ではなく犠牲者に罪があるのだ。」(この文句を二十年代のある有名な風俗犯の裁判で著名なベルリンのある弁護人が作った。)

人は危険にとりかこまれていた。このことは彼女たち二人とも知っている。しかしこの危険は逆の誘惑を期待させる——日常の単調さの救い、あくびの出そうな退屈の救いのような。

彼女が女中と午後買物にゆくと、会った男が二人にわけつな言葉をかける。子供たちが囁く

ようにしか発音できず、男と女の結合を意味する言葉である。彼女はその言葉がよく聞きとれないような様子をして、その言葉をもう一度声を出してくりかえしてくれと女中を困らす。女中は赤くなりだまっている。世界は突然こういう言葉でいっぱいになる。他のものはもう何も無いようである。あらゆる人の考えは逃げみちのない輪となって、性の問題のまわりだけを廻っているようである。彼女にとってはもう何の秘密もないようである。兄との事件以来彼女は何でも知っている。彼女は十歳である。彼女はむなし、悲しい気持がする。父がわけつな本を持っていたことで父を悪く解する。彼女の父。そのチャームのため神のような男の人なのに。失望は好きな先生への幻滅と同じくらい大きい。そして母からは最も悪いものしか来ない。母は速かに正体をあばかれる。母は尊敬できるような女ではない。母は利己的で、自分の平穏と都合しか気にかけない。母の部屋に入ろうとすると、長いことドアをノックしなければならぬし、そうしたところで入れてもらえるかどうかまだわからない。母は自分の部屋で一日中一人で何をしているのだろう。家では、母は自分のマニキュアをした小さな手を汚すといけないから、指一本動かさない。庭へは決して出ない。子供たちと決して遊ばない。だが訪問者を迎え、それもたきさんの訪問者を迎える。母はエレガントだが肥りすぎである。母は社交界の婦人のような態度をする。明るい、まごころのない笑声を立てる。しじゅう髪を染めてもらうので、本当の髪の色は何だったかもうわからなくなっている。母は、ぶざまな体に脂肪がつくのと不活発になるのを防ぐが、ためである。「おかあさんには三人の男がいるのよ」と娘は誰にでも、それを聞きたい人には話す。実際彼女の本当の父より、二人の訪問者の方がよく母のところへ行く。

彼女はひとりぼっちで非常にさびしい感じがするときよく母の寢室の戸を叩くが、めったに入られてもらえない。彼女は母が机で日記を熱心に書いているのを見る。毎日この日記帳にいろいろ記入する。机の中にはこういいういっぱい書いた日記帳がもう二十冊以上もある。あの中には何が書いてあるのだろうか。ときどきさびしさのあまり彼女は母に抱きつくが母は彼女を何かの物体のように押しつける。母は子供に毛抜きで白髪を抜いておくれといいつける。これは退屈な仕事で、子供がそれをするのは、母が白髪一本について五プフェニヒ払うときだけである。

兄とは敵対関係にある。彼女は彼を恐喝する、「私に自転車を買ってくれないなら、私にしたことをお母さんにいつけるわ。」自転車は新品できれいで、兄はとても大事にしている。だが彼はどうしたらいいのだろうか。彼は彼女に一時間貸す。彼女は自転車で全速力で大きなトラックにぶつかる。自転車の修理は彼女の小遣から払わねばならない。何事もうまくいかない。毎日毎日ちょっとした腹立たしいことだらけで、堪えられない。その上太陽はやたらにいつまでも青い空からぽかんと照っている。この生活に堪えるためには、全力をつくして空想に救いを求めるしかない。喧嘩に救いを見出すために、彼女は兄にいう、「自転車の修理代を返してくれないなら、電気マッサージの器械でやったことをお母さんにいつけるわよ。」兄は彼女を殴る。彼女は兄をひっかき、かみつく。彼女は兄より弱い。腹立ちのあまりすすり泣いてベッドに身を投げ、またとび起きて戸に錠をかける。いやだ、もうこの部屋を出ない、もう何もたべない、飢えと悲しみに死んでしまおう。

学校である女の子が彼女に、私はモノクルをかけた男の人が好きになっているという。このこ

とは彼女をむしゃくしゃさせ、彼女はやきもちをやく。彼女はその女の友達に、私は同じ町に住んでいて金歯をはめた伯爵を好きになっていると語る。

彼女たちは男のひとの事件を空想で作り出して自慢する。教室の隣の机のリジア・ジルはお医者さんごっこをした叔父さんの話をする。叔父さんはたとえばリジアに、彼女は腹の下の方が病気になるについて、手術をしなければならぬという。彼は彼女に着物を脱がせて裸にし、浴槽に寝かす。彼はシャワーを手にとり、湯を出して、シャワーを彼女の「きず」のところにあてる。リジアがこの話をくりかえし語るとき、彼女は手をパンツの中へ入れて速かにあちこち動かす。他人が見ることをちっとも気にしない。人の見ているところで自慰をすることは彼女の楽しみを一層高めるようだ。

思いがけなく、どうしてそうなったかわからないが、エクベルトがとても好きになる。彼のシナ人のような、動きのない顔、彼の無口は彼女に神秘的に見える。彼は彼女の知っている少年の中で一番関心を引く少年である。二人は屋根裏の物置に上り、そこに入って重い鉄の扉を開け、きまりが悪くてだまっている。二人とも同じことを考えている。キスのことを。エクベルトは二歳年上である。

二人のどちらも今まで一ぺんも本当のキスを受けたことがなかった。エクベルトはそういうときには口を開け、舌で何かしなければいけないと人が知っているのを聞いたことがある。何とむずかしいことであろう。彼は自分がそれをうまくできると思えない。彼はあまりにはかみやである。彼は紙と鉛筆をとり、彼女に彼の最初のラブレターを書く。

「ぼくは君が好きです。永遠にあなたのエクベルト。」

この手紙は彼にはきわめて長く、大胆な気がする。彼が彼女に書きたいと思い、彼女も彼が好きならば彼女が感じているにちがいない、言葉にいいあらわせないいろいろのことを思うと、この手紙は読むのに何時間もかかる手紙である。彼は思いきって彼女にこの手紙を渡す勇気がない。彼女は揺り木馬にまたがって、彼のことは忘れてしまったような様子をする。そっと横目でみると、彼は梯子を上ってその手紙を小さな天窓にはさんでいる。彼はまた下りてきて彼女の方を見もせずに暗い屋根裏部屋の一つに入り、箱の中を捜し物でもするようにひっかきまわす。彼の心づかいをありがたく思っ、彼女は梯子を上り手紙をとってくる。彼らは二人のほか誰にも読めない暗号を考え出していた。用心、用心、何が起るか誰にもわからない。二人の愛の行手をさえぎる残忍な敵がきつとできよう。

彼女は手紙の裏側に、「わたしは永遠より長く、火よりも熱く、あなたが好きです」と書く。

彼女は梯子を上りこの手紙を同じ場所に隠す。二人はお互にこんな手紙を書き合って何時間も過ぐす。だんだん二人は大胆になり、手紙は長くなる。「君に死ぬような危険があれば、自分の命を払ってでも君を救う。」――

「君は世界の中で一番美しい。これに反対する者は誰でも打ち殺してやる。」

それから彼女は隅で横になって目を閉じる。彼女は期待のあまり震える。物音一つしない――当惑してしまう。彼はどうしなければならぬかわからない。細い、小さな巻いた紙が彼女の手の中へ押しつけられる。彼女は彼の足音が再び遠ざかるのを聞く。彼女は小さな巻物を開いて手

紙を読む、「ぼくはどうやって君の目をさませるか知っています。」

彼女は紙を裏がえして裏側に質問を書く、「それじゃどうやって。」彼女は彼が何と書くか知っている。あらゆる女の子はそれを持つ。彼女はそうでない。この遊びは彼がキスをしてくれればそれで済みであろう。彼女はいつも期待に生きたい。一回のキスで一切おしまいになるのじゃないか。その後また何が起る必要がある。二度目のキスとなれば、あとは一切がもうふうのやりなれたことになってしまう。彼女は立上がり、すすり泣きながらかけ去る。愛とはこんなに短いものか。キス以外何もないのか。抱擁は。それから兄が彼女にやったことは。それは本当にもうそれだけのことなのか。

彼は絶望して彼女の後からじっと見るばかりである。だめだ、彼は彼女のような女の子のことは何もわからないのだ。

この年の夏彼女は水泳を習う。それは昔風の木のプールで、くいを竝べて作ってある。その名は「ハーレンゼー・スポーツプール」という。板を渡ってゆくとプール全体が揺れるような感じがして、ふわふわ浮いているような不安定な感じがおこる。くいにはこけや水草が一面に生えていて、緑色の濁った水に映っている。服をぬぐうために更衣室を借りると、鎖についた真鍮のしるしをくれ、これを手くびに巻いておく。まだ泳げない子供のための大きな浅い水槽もある。階段から水に下りる。二人の日に焼けた水泳の先生が教習を指導する。彼女は大きなブリキのかんを背中に結びつけられ、その上鉤と紐でしっかりつながれる。水泳の先生はまずリズムを教え、次に水泳運動を手本通りに行わせる。水泳練習時間が終る毎に彼女は水泳の先生が泳いだり、十メ

ートの高さの板から水にとびこんだりするのを感じて見る。彼は腕を抜けて鳥のように空を飛び、エレガントな軟かな運動で水に滑走する。水泳がすむと彼女は木の橋に横になって日光浴をする。水泳ののちのふしぎな緊張弛緩で体はたるみ、くたくたになる。体が痙攣して硬くなる傾向がある彼女にとっては水泳はまだ知らなかった緊張弛緩である。

彼女は腕をひろげてあおむけに寝て、神の恵みのように太陽を受入れる。彼女はこうして太陽と結びつき、ついには孤独でさびしいという感じがなくなる。あらゆる悲しみは消え、何時間か我家から逃れられていることがうれしい。ふしぎな匂いがプールの上にただよっている。水と、太陽に乾く木の匂いと、たばこの煙の匂いと、香りをつけた日焼どめの油の匂いである。水はゆっくりと、リズムカルに木のくいにぶつかる。水泳の先生の数をかぞえる声は単調に響き、潮をわたる歌のようである。水浴客の会話の声は低く、眠気をもよおす。彼女は立上がつて、おとなたちを観察しはじめる。観察。これは彼女にとって尽きることのない楽しみである。異邦人風の男の人たちの一群のまわりにもめずらしげにぎっしり集って見ている子供たちの環がある。彼らの一番大きな人を見ると突然彼女の心臓はどきどきする。彼は、彼女を殺そうと、夜暗い広間でたいまつを燃やして彼女を待ち受けている黒い人たちの一人にそっくりである。いっぺんにとっても好きになって、彼女はこの男の人を、深い、ひそかな愛の対象に選ぶ出す。

彼は彼女を見ないし、彼女を知らない。彼は、彼女が彼を見ておこした心の強い動揺のことは何も知らない。とうとう彼女ははじめて大きな神秘的なものを感ずる。この男の人たちは、子供たちが理解しない言葉を話す。このことは秘密の感じをますます高める。彼の注意をひかないよ

うに用心深く、彼女は立ち上がり、子供たちの環の中に入る。彼女は彼に近よりたい。急に彼女の顔は興奮とものすごい喜びで熱くなる。同時に限りなく悲しい感じがする。彼は男だ。彼は彼女にとって到達できないものだ。

彼女は彼のすばらしい、長身の、日に焼けた体、しなやかな関節、黒い、メラニコリックな顔に眺め入る。彼は静かに深く息をしている。彼の胸には金のお守りが、黒い紐で下げてある。彼は青と赤の縞のバスローブの上に横たわり、このバスローブは彼に對しお伽噺のような豪華な背景となっている。彼のつやのある黒い髪は少し巻き毛である。彼の目はありえないくらい大きく、真剣な、勇敢な表情をしている。彼の三人の友人たちは子供たちとたわむれている。彼はだまっているが、彼の目はやさしい表情で子供たちにじっとそそがれている。彼はあらゆる高貴なすばらしい民族を自分の中に合一しているように見える。彼女はこの顔に酔ってしまふ。自分の生涯にこんなすばらしいものを見ることはなからうと思う。二本のメラニコリックな深いしわが鼻翼から口へ走る。今とうとう彼女は自分がなぜ生きているかわかる——彼との出会いのために。彼女は望みを失った、暗い時に、よく、なぜ自分はこの世にいないかならないのかと思った。両親が彼女を生んだことは両親が悪いのだと思った。彼女に敵意があり、不親切と思えたこの世。彼の出現によって彼女は非常に心を打たれて、今すぐ死んでもいいくらいだと思う。この異邦人をつくづくと見ることぐらいすばらしい、興奮させることはない。生れてはじめて、彼女の父でない誰かを愛する。彼女が感じたことのある最も厳肅な感じである。彼女の体はふるえだし、目は涙でいっぱいになる。のどをしめつけられたような感じで、殆んど息ができない。そうだ、き

と彼女はこのすごい感じで死んでしまうのだ。愛の重みに死ぬことなしに、誰が愛の重みに堪え得ようか。これが彼女が子供のときに初恋として感じた重い運命である。彼女は少しも今までその経験がなく、防ぐすべもない。彼女は嵐の中のごみのつぶのような気がする。彼女ははげしいつむじ風の中にいるようだ。彼女を助けることができる者は一人もない。こういうことを少しでも感じてくれる者は一人もない。そうだ、たしかに、自分は彼に出会わねばならないのでこの世に來たのだ。そしてこの出会いから底知れぬ深さの悲しみがはじまる。彼女は隅々まで愛で満たされる——愛はあふれ出る。彼女はこの感じを理解するにはまだあまりに幼い。これは厳肅なことだ——非常に深く厳肅なことだ。彼はいったい彼の目を彼女に決して向けないのか。同時に彼女は彼のまなざしに堪えられないのではないかと思う。彼が彼女をじっと見たなら、彼女は直ちにこの黒い目の下にきつと燃えてしまおう。彼女があこがれにあこがれてこちらへ向きたいこの厳肅なまなざしを彼女はまだ依然として受けずにいる。彼女は時間を忘れる。彼女は両親の住んでいる家も忘れる。彼女は帰宅し宿題をする時間が來たことを忘れる。

この夜彼は幽霊になって彼女の家のまわりをうろつき、彼女の窓の高さまで上つてのぞきこむ。いつまでも、静かに、厳肅に、彼の目は彼女に向けられる。すると彼女は両手で顔をおおい、泣きだす。彼が現実では彼女をちらとも見てくれなかったにしても、深い、心を動かすような愛が輝き出る彼の目で彼女をじっと見るのを心に描き出せるようになったのだ。彼女が眠っている間、彼はじっと彼女の上にかがみこんでいる。彼女こそ彼が求めるがどうしても授からない子供である。彼女が目がさめるとき、彼は窓のあちらに立ってほほえむ。部屋じゅうこのほほえみ

でいっぱいになる。鏡の前で彼女は彼に似るようにやってみる。彼女は今までにない、軽い、優雅な身の動かし方をする。彼のために彼女はすばらしい妖精のような踊り子になりたい。彼女は殆んど支え切れないほどのこういう豊かさにとりつかれていると感ずる。空虚と孤独の長い日の後に突然充実した生活に入る。この充実はますます大きくなることを止めない。彼女が眠る時のみ、この新しい感じがやっと休まる。朝学校へゆくとき、彼女は街をあちこち見て彼が来るかどうか見る。彼が見えなくても彼がどこまでも一緒に來ることが自分にわかる。彼女は彼が彼女のことを少しも知らないことを忘れている。彼は彼女の生活をきつと全部知っていると思う。彼女は奇蹟があることを信ずる。彼は戸が閉つていても入ってくる。彼はすでに家の中のあらゆる物を知っている。彼は彼女が彼の顔を画こうとすでにやってみたことを知っている。この絵は女はうまく隠すと彼はそれを笑う。彼は隠し場所を知っており、この絵を知っている。この絵は彼女が一所懸命に画いたので、この肖像はよく似ている。彼女の他の主人公の英雄たちはだんだん消え去る。彼女がいけにえにされる暗い広間はもうない。今は彼女はもう死にたくない。彼のことを考えること以外のことはしたくない。彼女に要求される僅の学校の義務をはたすこともじやまになる。彼女は注意を学校のことに集中できない。彼女は悪い生徒になる。

ますます深く彼女はその夢想に耽る。誰かに話しかけられると、はっとする。しかしエクベルトとフランツは彼女の秘密をあてた。彼らは彼女をプールでよく見ていた。彼らは彼女が異邦人に執心しているまなざしを見たのだ。しかし少年たちは彼女をあざけりやあてつけで苦しめるようなことはしない。エクベルトは悲しがる。彼女は彼がもはやいやな態度をとる。彼の手

紙にもう返事をしない。彼は引きさがる。

彼女は毎日午後プールに行き、水泳練習が終ると木の橋の上に坐り、彼が見ていなければこの異邦人を嘆賞する。彼は目をつぶってたばこを吸う。彼女の学校の女生徒が一人彼のそばに坐っている。大きなすばらしい胸の女の子である。彼女より年上の女の子である。彼女は嫉妬で苦しい感じがする。この女の子はいつかつきの術をもう心得ている。彼女はこの異邦人のすぐわきに横になり、肩が偶然のように触る。この女の子を一瞥もせず、彼は立上って水にとびこむ。彼女は凱歌をあげる。家へ戻るとこの晩くつかえし彼の顔を画く。この絵を机のひきだしに隠し、その鍵も隠しておく。夕食のとき一言もしゃべらない。彼女は早くベッドに就き、彼のことを考える。彼女がはじめて彼と話をするのはどんなだろうかと心に画き出そうとする。そういうことには決してならないだろうか。

ある雨の日、プールに行けず、彼女は彼にもう会えないことを考えてみる。いつも愛し、同じ強さで愛するというチャンスは望みのない愛にのみある。彼女はこの真理をいくらかうすうす感づいている。それはほしがるが誰もくれないチヨコレート板のようなものである。そのことを考えるのが止められず、それはひどく重要性をおびる。それは到達できないものだ。

また太陽が現れ、彼女は気抜けから目をさます。太陽は今や最も大切な要素である。太陽によって彼女は彼に再び会うことができる。太陽が彼女の家の中へ何ときらきらと光を放つことだろう。広間の高い窓から床に落ちる光線は広い梁となり、その中にほこりが踊っている。彼女はこういう日光の梁を上って空へよじのぼろうとする。彼女は十二歳なので、彼女はまだひどく子供

っぽいことをよくする。彼女は奇蹟を信じている。そしてすきとおった太陽の梁からうつぶせに落ちる。きつとこの次にはうまく行こう。

夏休が近づく。全く自由な時だ。やがて彼女は何の果たすべき義務もなくなる。彼女ができるだけ家にいない方が母には都合がいい。父は旅行中である。彼女は父のことはろくに知らない。彼女は父にそこがれを持つが、父とも彼女の愛の秘密のことを話すことはできない。

運わるくもこの日彼女の兄がその友人たちと共にプールにやって来る。兄は彼女が子供たちの環の中に坐って異邦人に夢中になっているのを見る。兄は彼女が夢中になっているのに気がつく。このことに兄は腹が立つ。兄は警官になったように彼女をじっと観察する。兄は彼女の顔に夢中になっている表情を認める。彼女は兄のいることを忘れていた。彼の近くにいて何でも忘れてしまふのだ。彼女は用心深く彼の背中の後に席を占める。彼女はまだ彼に気づかれない。彼がもうすぐ分けてくれるキャンデーを待っている他の子供たちと何というちがいだろう。彼は立上って水にとびこむ。すばらしい大きな胸をしたあの年上の女の子がそのあとから続き、彼を追って泳ぐ。この女の子は経験を積んでいて、恋をしている女の子のような態度である。女の子は彼のすぐそばを泳ぐので体が触れあう。彼は女の子の頭をぱつとつかんで女の子を水に沈める。年下の女の子たちは彼女をからかって笑う。彼女たちはこの女の子が経験を積んでいるのを悪くいう。彼女は彼がやぐらに上って水中にすばらしくエレガントにとびこむ時を待つ。彼は愚かれたようにくりかえし一番高い飛込台から急降下する。彼は太陽の中で輝き、目のくらむような光の中で鳥のように、また魚のように飛ぶ。子供たちは皆彼の名を知っている。彼は長い、こみ入った、

貴族的な名を持っている。彼は仕事をしていないようである。子供たちは有名な俳優だと思っている。しかし誰も彼の出る映画を見たことがない。(彼が俳優であることは本当だが、ごく端役しかやらず、金もろくに持っていない。しかし王子様のような服装をしている。恐らく食物も少なく、みすぼらしい室に住んでいる。)

この子供時代の初恋の経験は、おとなが教えるよりも深く心にしみて教えるところが多い。すなわち崇拜しながらじっと動かずにいることが必要なことである。行動しないということをおきてとすることである。すばらしい大きな胸のあの女の子はどうなっただろう。彼の軽蔑を買っただけだったのだ。

彼女はしかし彼に近づかない唯一人のままでいよう。恐らく彼は俳優なんかではないだろう。彼は子供たちの誰にも自分の話を何もしなかった。彼は静かにすばらしいバスローブの上に横になって、たばこをふかしている。彼は誰も仲間として要らないような様子をしている。彼女は彼と同じようにしようとし、エクベルトとフランツから手を引く。孤独は彼女には高貴に思える。彼女は彼に気がつかれないように彼を観察する術のけいこをする。彼女は誰一人として彼に対する彼女の崇拜を何も知らないと思っている。

しかし彼女は思いちがいをしている。兄は一目ですべてを見破っていた。

あるよく晴れた日に彼はプールに來なかつた。彼は病氣だということだ。彼女は心配と驚きのあまり死ぬのではないかと思う。彼女は自分が誰とも話ができないくらい悲しい。彼はきつともうすぐ死ぬのではないか。彼女は彼をもう一度見ることにしか頭がない。彼が水泳の先生と親しいこ

とを彼女は知っているので、勇気を振って水泳の先生に彼の住所を尋ねる。彼はウーランド街二十番地に住んでいる。これはプールからずっと遠い。そこで彼のところへ出かける。彼女はひとりで町を出歩くことに慣れていない。彼女自身は町の近郊の静かな別荘地のグルーネワルトに住んでいる。町の人ごみにまごついてしまふ。自動車はこわい。彼女は速かに、下を向いて歩く。彼女は誰の顔も見ない。道をまちがえたらたいへんだ。プールから長い長い道のりをいつまでもまっすぐに行く。それにも拘らず彼女は道に迷って彼の家へ行けないのではないかとひどく心配する。彼女はますます歩を速めるが、道はきりが無い。彼女が町の上流住宅のあたりに來ると、高価な衣裳を着た美しい婦人たちが、カフエテラスに腰をおろして泡立てクリームのついた菓子を食べている。

彼女は熱くなり髪はくしゃくしゃになる。彼女の服は一番着古した夏服で、もうすっかり短くなっていて。町のきれいな色の絹の服の婦人たちとくらべて、自分がいかにも醜く、みすぼらしく思える。町の婦人たちは指輪や鎖を着け、ぴかぴかのハンドバッグをばちんとしめる。口紅をとり出して化粧する。長い、絹靴下の脚を組んで、踵の高い靴をはいている。彼女の足は靴下もなくむきだしで、古い破れたサンダルをはいている。彼の前に出るのは今から恥ずかしい。

彼女の小さな汚れた手に銀貨を一枚持っている。腕にはぬれた水着がくるんであるタオルをかかえている。彼女の力は、やっとウーランド街に着いたころ、だんだんと尽きてしまふ。彼女は彼の家の近くであるという興奮のあまり心臓がどきどきする。一体彼女は彼のところへ入れてもらえるかしらと思う。果物屋があるので銀貨でカリフォルニア産の桃を一ポンド買う。そして

とうとうやっと二十番地に来て、家の中に入る。水泳の先生は、この異邦人は下宿に住んでいるといった。彼女は階段を上ると、勇気をすっかりなくしてしまう。いっそのことまた戻って家へ帰りたくなる。ただ彼の病気が危篤で、死にかかっているかもしれないという不安から、下宿の戸のベルを鳴らす。白髪の老婦人が戸を開けてくれて、びっくりして彼女をじっと見つめる。

最後の力をふりしぼって彼の名をいい、病氣なのでたずねて来たのだとささやくようにいう。

老婦人は彼女を入れて、ある高い白い戸を叩く。「お客さんですよ」と閉じた戸のこちらから呼ぶ。「お入りなさい」と戸のあちらから声がし、老婦人は戸をあけ、子供は彼の室に入る。彼女は桃の紙袋を胸におしつけ、やっとのことであいさつをする。彼女は彼女の生涯の中で一番大事な瞬間に会っているのだと思うが、何かやってはいけないことをやってしまったという気もする。十二歳になれば、知らない男の人の室を訪れてはいけないのだ。

今彼女は大きな胸をした年上の女の子と同じことをやっているのではないか。彼にはほとんど気づかれることなしに、いつまでも前に出ることなくひっこんでいようとしたのではないか。しかしもうおそすぎる。老婦人は彼女をさっと室に押し入れ、戸を閉じてしまっている。

彼はベッドに横になっていて、大きな悲しげな目で、びっくりして彼女をみつめる。彼はバスローブを体にまとって、頭にきれいをまいている。彼はのろのろと起き上がり、その目つきはますますびっくりしてくる。彼女は恥ずかしくて地面の中へ沈んでしまいたい。何といていいのかわからない。ここへ来たことを呪う。何もが本当でなかったと思う。知らない街を通る長い道程、ごたごたしたいっぱいの自動車と人間、階段を上り知らない人の戸でベルを鳴らしたことなど皆

本当でなかったのだ。彼女はいつまでもまごまごして、手に持った桃の紙袋に気がつき、だまって彼のベッドに置く。「ここに何の用なの」と彼は額に八の字をよせて尋ねる。「前にプールで見たことがあるんじゃないかな。」彼の声はしゃがれて、話すというより囁くといってよいくらいである。たしかにひどくのが痛いのだ。彼女はあいかわらずいつもと同じように、だまって夢中になって彼をみつめる。突然彼は彼女をはっきり思い出す——彼女はプールで会った小さな女の子や大きな女の子の中で一番控え目な女の子だった。彼はなぜ子供たちの心が彼にひきつけられるのかとよく考えるが、その意味がわからなかった。おそらく彼が彼らの目の関心をひくようになるのは、彼の受身の態度であろう。彼が子供好きなのはたしかである。おそらく子供たちはこのことを言葉を通じないで感じるのだ。しかし子供たちの間で一番だまっている女の子が今彼のところへ来たとは信じられないような気がする。このことは彼を不安にする。彼はふいに彼女の大きな黒い目の献身的な表情を気づく。彼は彼女の心の中に何が起きているのか突然わかり、心にショックを受ける。

彼女の酔をさまし、途方もない望みを彼女から除くために、彼はまじめにきつくいう、「女の子は知らない男のところへそう簡単に行くものではない。お父さんがこのことを知ったら何というだろう。」

「決しておとうさんにはいいません」と彼女はうけあう。

「それをどうしようというの。」彼は桃の紙袋を指していう。

「あなたにあげようと持って来たんです、私のお小遣で買って」と彼女は誇りがましくいう。

彼は当惑を隠すために、桃を一つ取ってかじる。彼は彼女に桃を一つ与える。二人が話をせすにすむ仕事がつまったので、だまって、しあわせに、二人はゆっくりと桃をすっかりたべる。彼女は彼が吐き出した桃のたねを拾って、ほほんとポケットにしまう。「あなたの記念に」、彼女は赤くなってささやく。この桃のたねは彼女のお守りになる。もう今からこのたねに孔をあけられようかと考え、それに紐を通して頸にかけようと思う。彼女にすばらしいアイディアがわく。机に彼の記念に秘密の引出しをこしらえ、彼の記念品をいっぱい入れておこう。彼女はもう不安はない。彼に信頼しきっている。彼は彼女が彼を好きなことを今は知っている。しかし彼女には彼が今日見おさめになるかもしれない。再び会うのを妨げるどんな恐ろしいことが起こるかかわかったものじゃない。地球は太陽と衝突して、爆発し、大きな火の玉になるかもしれない。あるいは彼女が彼かは死ぬかもしれない。どんな不幸が近づくか誰にもわからない。再び会えるのを妨げる恐ろしいことが起こるかもしれないのだ。そこで彼女は彼に一つのお願いをする。彼女はおぼろげとひどく小声でいうので、聞きとるために彼は体をかがめなければならぬ。「あなたの髪の毛を一本でいいから下さいませんか。」彼女のこの上ない幸福は彼の答一つにかかる。彼は彼女の本気さに心を動かされる。彼は今日が彼女にとって非常に大切な日であることに感づく。彼のところに来るためにどのくらいのことに打ち勝たねばならなかったろうか。彼はやさしく首をたれて、彼女は注意深く髪を一本だけ引き抜き、注意深く紙に包む。彼女は守るようにその紙をにぎりしめ、彼にほえみかける。

最後にありったけの勇気をふるいおこして、彼に写真をくださいという。ためいきをついて彼

は立上って、一番小さい自分の写真を探し、やっと見つかる。「誰にも見つからないようによく隠しておくんだよ」と彼はいう。今や一つの秘密を二人していっしょに持っている。彼女は彼から離れても自分を彼から離せないのだ。彼は小さな、深く信頼した動物といっしょにいる感じである。たしかに彼は子供や小さな動物の方がおとなより好きだった。彼はおとなはすぐ飽きてしまい、こまらせるようなことをやったりいったりする。

彼女は写真を別の紙に隠し、握った両手は秘密でいっばいになる。それから彼女はだまって彼をみつめて我を忘れる。彼は工合がよくない。熱があり、のどがいたい。「今はやすらかに死ねます」と彼女は彼にうちあげる。そして再び彼は彼女の本気さに打たれる。

彼はとうとう彼女にもう家へ帰りなさいという。彼女は彼にどこにも止らずにまっすぐに家へ帰ることを約束させられる。彼は彼女がひとりで大きな町に行くのが心配である。彼女は彼のところを辞し、夢をみているように長い帰路につく。今や彼女はもう彼に会わなくていいくらい強くなった気がする。はじめから彼女の愛には望みがなかったのだ。家へ戻ると机のところに坐り、小さな写真の通りに彼の顔を画く。その仕事はやめられない。顔はだんだんよく似てくる。彼女は絵を小さな引出しの中に隠す。その鍵も隠す。机は彼女の室の中で最も大切な家具となる。それから彼の写真の隠し場所を探す。

彼女は机の中に思いきって入れておけない。誰にもわからないように……。壁にかけた絵の下ので、彼女はナイフで壁紙に切れ目をつけ、写真をそこに押し込む。しかしここでも誰かが見つかるかもしれない。写真を見つからないように隠すという問題が彼女

を不安にする。写真を誰にもみつからないようにうまく隠せと彼が頼んだではないか。いつか壁紙を張りなおしたり塗りなおしたりするのに絵をはずすのではないか。おとなの整理好きは彼女を今までよく疑い深くさせ、彼女はいくつか好きな古いおもちゃを失った。そんな古いおもちゃはおとなは簡単に捨ててしまうのである。ナイフで再び写真を押し出し長いこと考えながら手の中に隠している。決心がついたがつらそうな表情が彼女の顔に現れる——たった一つの解決しかない。

彼女は写真を口に入れ、たんねんに嚙んで呑み下す。彼女は彼と合一したのだ。血盟団に匹敵する儀式の気がする。まだもうひとつ彼の髪の問題の解決が残っている。彼女は赤い色の封蠟と、蠟燭とマッチを取り、封蠟の玉の中に髪を封じ込む。彼女は黒いリボンに赤い小さな玉をしかり付け、お守りを頸にかける。桃のたねは庭に埋めて隠し、いまに大きな桃の木が生えよう。そして彼女が年をとったら、この木の下に坐って彼のことを考えよう。

彼女が長く家を離れたことは気づかれずにはいなかった。どこへ行っていたか聞かれると、いいのがれをするが、誰も信用しない。兄は、彼女にいやなことができるのがうれしくて、母にプールの外国人の男の話をし、彼女はいつもその男のそばにいたと告げる。母はもうプールに行ってはならないといい、夕食をたべさせずに、まだ明るくて庭で遊べるのにベッドに追いやる。

まだ太陽は照り、鳥は歌っている。彼女は深い絶望に落ちこむ。プール行きの禁止は彼に再び会えることを不可能にする。彼女は前に彼に再び会えなくてもよからうと思った。しかし今はこの考えには我慢できない。彼にもう会えないことは彼女に死を意味する。彼女はベッドに入っ

夜を待つ。小さな赤いお守りを手に持って、愛の希望を失って彼のことを考える。こういう時には父と話したい全部打ちあけたいが、父はあいかわらず旅行に出ている。これからまだ二週間立たなければ戻ってこないことになっている。

彼女は兄を心の底から憎む。彼さえいなければ皆うまくいくのだ。彼は彼女を監督する警官の役をいつもしなければ気がすまないのだ。彼女は彼に最大の不幸が起こればいいと願う。彼が最もひどい苦しみを受けて彼女の足もとに死ねば彼女は満足だ。それから彼女はプール行きを禁じて非常な悲しみを彼女に与えた母を憎む。彼女が生活しなければならぬ世界は何とひどい世界なのだろう。彼女は敵にとりかこまれていて。柵と妨害物しかない。彼女は窓から外を見て近く死のうと考える。窓からとびおりようと決心する。大きくジャンプして体を大きく跳躍させれば、「異郷に死」ねよう——この言葉は彼女はどこかで読んだことがあって忘れられないものである。ああ、夜にならないかなあ。——しかし鳥はあい変らずさえずり、太陽は沈もうとしない。彼女は死ぬ勇氣は暗い時にしか起こらないことを知っている。彼女は室の中に前に作ったインディアンの天幕の中に横になり、見おさめとして彼女の宝物をよく見る。父は彼女に小さなインドの仏像と、エジプトの王女の腕輪と、トルコのクッションをくれた。彼女は色のついたガラスのおはじきの玉のコレクションと、六つの大きな玉に丸めた銀紙のコレクションとがある。髪にかざるリボンのコレクションと、切手のコレクションもある。二個の日本の扇と、ジュール・ヴェルヌの「海底二万マイル」も持っている。それから小さな子供のときに遊んだ長毛のビロードの虎がある。彼女は天幕を作って、近東やアジアの父のコレクションが入っているすばらしい「インド

室」のまねをしようとしたのだった。この天幕を捨て、インド室をもう見ることはないのは非常につらい。ああ、彼女が住んでいる家はとてもすばらしい。アフリカの毒矢もある。金の糸で刺繍した竜のついたシナのじゅうたんもある。アラビアの直線や曲線を彫った家具もある。下のインド室にも彼女の天幕にも、彼女が何よりも好きな現実の夢の世界がある。そして彼女の学校の友達も彼女の天幕をどんなに感嘆したことだろう。彼女が死んだら他の子供たちは何というだろう。それから先生も。彼女がいなくて悲しいと思うだろうか。きっと皆は彼女をすぐ忘れるだろう。彼女はしかしやっとな平和を得るだろう。彼女は非常に気分が悪くなり、心が傷ついて、泣き出す。それから彼は何というだろう。彼女が死んだらそのことを一体知るだろうか。きっと他の子供たちが彼にプールでそのことを話し、彼は彼女が彼への愛から死んだことを知るだろう。彼女はためいきをつき胸がはりさけるほどすすり泣く。彼女は生涯に今までなかったくらいひとりぼっちの感じがする。家の中はひっそりしている。まるで誰ももう住んでいないように。

彼女の父は枕元の机の上に弾をこめたピストルを持っている。彼も自殺しようと思つて前を考えたことがあるのだろうか。いつか自分の死を考えたことのない人は一人もない感じがする。

それから彼は？二つの別々の顔を持っている彼は？彼のいるところで太陽にでもあたたまるような小さい子供たちを見るときの輝く、幸福なほほえみの顔の彼。それから黒い目を閉じ、じつと太陽の光の中に横たわっている深い厳肅な顔の彼。彼は幸福なのだろうか、どうであらうか。きっと幸福ではない。いったい幸福な人間なんてあるのだろうか。この大きな世界の中にどのくらいたくさんの人が今窓のところに立って、とびおりようと考えているだろうか。人間と、動物と、

自分自身への熱い同情が彼女にいっぱいになる。彼女はわっと泣きだす。それにびくりして彼女は自分の口の中にハンカチを詰めて、誰にもその声が聞こえないようにする。彼女は誰も見たくない。今母や兄が来て、彼女に加えた悲しみの詫びをいっても——彼女は戸を開くまい。彼女は二人を許すまい。だんだん暗くなってくる。だんだん彼女はまた落ちついてくる。涙は流れ止む。彼女は封蠟の玉を取り、その中に何が入っているのか誰も知らないのだということに気がつく。次の朝彼女の死んでいるのが見つかる、皆はこの玉はどういうことなのかといふかるだろう。

彼女は机の引出しを開き、絵を取り出す。彼女は自分の愛をもらすようなものは何もあとのこしたくない。この肖像画を焼いてしまうのはちょっと悲しいが、そうしなければならぬ。おそらく皆は彼女のお守りを頸にまいて葬るだろう。彼女は自分の一番美しいパジャマをたンスから取り出して着る。見おさめとして鏡に映った自分をつくづくとみる。彼女が落ちて地面にぶつかって、美しいパジャマは血と土にまみれるのを想像する。

墓地は死んだように静かであり、皆は自分たちの罪を意識してお互に顔を見合わせる——お前たちはここに一人の子供が愛故に自ら命を断つたのを知らないのか。そして親たちはこの日から自分の子供たちとずっとおだやかに、やさしく交わるようになり、同じような運命が起らないようにする。そして彼女は自分のやわらかいベッドとちがって十分体をのばせない、狭い硬い棺のことを考える。兵士のように直立不動でその中に横たわらなければならぬ。だが落ちるときに負傷するだけで命が助かったら？

恐らく一生涯脚が麻痺したままであろう。

とびおりて死ぬには三階の高さで十分だろうか。自分の部屋から忍び出て屋根裏に上った方がいいだろうか。屋根裏からとびおりる方がきつと確実であろうか。恐ろしい余病！

しかし彼女は自分の部屋を出る勇気がない。誰か家の人に出会うかもしれない……。

自分が死んだら美しい姿でありたい。皆が彼女に感心して、こんな美しい死んだ子供を見たことがないというようにしたい。

部屋は殆んどまっ暗である。街灯の遠い光は窓から弱くさしこむ。今は彼女は「異郷」で死んでも自分の庭でもどちらでもよい。窓のしきいに上り、窓の錠戸の紐にしっかりとつかまり、もう一度鏡に映った彼女の影のような姿をよく見る。彼女は自分がチャイミングだと思い、彼女の決心に少し後悔がまじる。「もうおしまい」と彼女は小声でいって、足が窓のしきいを離れる前にもう死んだ感じがする。彼女はまさかさまに落ちて頸を折る。彼女の小さな体は奇妙にひん曲って草の中に横たわる。彼女を発見した最初のものは犬である。犬は彼女の両脚の間に首をさし込んで彼女をなめはじめる。彼女が全く動かないので、犬は小声でくんくん鳴きだし、彼女の傍に、草の中へ身を横たえる。

訳者あとがき

ウニカ・チュルンは一九一六年七月六日ベルリン・グルーネワルトに生まれる。彼女は自分で「すてきな」と形容している幼年時代を、著作家で大旅行家であった父の蒐集したオリエントの品々に囲まれて、送る。

勉学を終えると、記録保管係、フィルム編集者、美術顧問としてウィファ（UFA映画会社、ウニヴェルズム・フィルム・アクチエンゲゼルシャフト、万国映画株式会社）社で仕事をする。

一九四九年に彼女はドイツとスイスの新聞に寄稿しはじめる。ベルリンで一九五三年に彼女はハンス・ベルメールに出会い、彼は彼女をパリに連れ去る。彼女はそこで初めてのアナグラムの詩を創作し、「自動画」を描く。同じ年に「頭の中の太陽」画廊で個展を開く。一九五四年にベルリンで十点のデッサンと十篇のアナグラムの詩（魔の歌詞）が刊行され、ハンス・ベルメールのあとがきがついている。一九五七年の「頭の中の太陽」画廊における二度目の個展には、アンドレ・ビエール・ド・マンディアルグが目録の序文を書いている。彼女がアンドレ・ブルトン、ヴィクトル・ブラウネル、ジャン・アルプ、マルセル・デュシャン、マクス・エルンスト、M・